

教育問題とグローバル教育

日時

2019年 12月20日(金) 10:30~12:00

場所

宇都宮大学峰キャンパス 5B11教室(5号館B棟)

*参加費無料:どなたでもご参加いただけます。

プログラム

10:30~ はじめに:挨拶

佐々木一隆 (宇都宮大学国際学部 学部長/教授)

10:35~ 趣旨説明

重田 康博 (宇都宮大学国際学部 教授/国際学部附属多文化公共圏センター)

10:40~ 学生によるワークショップ「教育問題と私たち」の紹介

発表者:「グローバル・イシュー研究演習Ⅱ」履修学生

10:50~ 基調演講 鈴木 晶子 (公益社団法人シャンティ国際ボランティア会 広報リレーションズ課課長)

「質の高い教育を届けるために—SVAの活動事例から—」

SDGsの4番目の教育目標達成のために、日本のNGOであるシャンティが実施している事業を通して見える現場の現状、事業実施の困難さ、チャレンジなどをお伝え致します。

11:45~ コメント 栗原 俊輔 (宇都宮大学国際学部 准教授)

11:50~ 質疑応答

11:55~ 終わりに 倪 永茂 (宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター センター長)

12:00 終

主催: 宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター

後援: 宇都宮市、宇都宮市教育委員会、(公財)栃木県国際交流協会、NPO法人宇都宮市国際交流協会

協力: NPO法人開発教育協会、まちなか・せかいネット-とちぎ海外協力NGOセンター

*後援および協力については申請中

講演者紹介

鈴木 晶子 公益社団法人シャンティ国際ボランティア会 広報リレーションズ課 課長

岐阜県出身。2005年入職。緊急救援担当として国内外の災害支援に従事。2007年より4年間、カンボジア事務所駐在。2011年よりタイ国境ミャンマー（ビルマ）難民事業、東日本大震災支援事業に関わる。2015年より現職。『わたしは10歳、本を知らずに育ったの。』（合同出版/2017年/共著）

趣旨説明者紹介

重田 康博 宇都宮大学国際学部教授/附属多文化公共圏センター（CMPS）

専門分野は、国際開発研究、国際NGO研究。国際協力NGOセンター（JANIC）政策アドバイザー。開発教育協会評議員。著書に、重田康博・真崎克彦・阪本久美子『SDGs時代のグローバル開発協力論—開発援助・パートナーシップ再考』（赤石書店 2019年）、重田康博『激動するグローバル市民社会—「慈善」から「公正」への発展と展開』（明石書店 2017年）、重田康博「第2章『『公正な社会』って、どんな社会？』西あい、湯本浩之編著『グローバル時代の「開発」を考える—世界と関わり、共に生きるための7つのヒント』（明石書店2017年）、他。

コメンテーター紹介

栗原 俊輔 宇都宮大学国際学部 准教授

JICA（国際協力機構）専門家（復興開発アドバイザー スリランカ）、CARE International プロジェクト・ディレクター（スリランカ、東チモール）横浜国立大学国際社会科学部研究科 博士（学術）School for International Training, Vermont, USA Master in International and Intercultural Management。

セミナー関係者紹介

阪本公美子	宇都宮大学国際学部准教授
湯本浩之	宇都宮大学留学生・国際交流センター教授
鈴木 アリサ	宇都宮大学国際学部国際学科
李 晶玄	宇都宮大学国際学部国際学科
金田 日菜子	宇都宮大学国際学部国際学科
木村 華	宇都宮大学国際学部国際学科
桑川 涼	宇都宮大学国際学部国際学科
ボウ ショウハク	宇都宮大学大学院地域創生科学研究科 M1
ラ トウ	宇都宮大学国際学部 研究生
ハナビ ヲツヤハ	宇都宮大学国際学部 研究生

■ アクセス

宇都宮大学峰キャンパス
〒321-8505宇都宮市峰町350



■ お問い合わせ

宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター
TEL/FAX : 028-649-5228
E-mail : tabunka-c@miya.jm.utsunomiya-u.ac.jp

は じ め に

—2019 年度第 11 回グローバル教育セミナー開催にあたって—

世界には学校に通えない小・中・高の学齢期の子どもと若者の数が2億6,400万人といわれ、この「世界的教育危機」に取り組むために、2017年9月20日の国連ハイレベル会合で各国政府による支援が表明されました。

第2次世界大戦以後、国際教育協力は、ユネスコなどの国連機関や世界銀行で進められ、1990年3月タイのジョムティエンで開催された「万人のための教育世界会議」において「すべての人に教育を（Education for All : EFA）」というメッセージを含む「万人のための教育世界宣言」が出され、「初等教育の普及化（Universal Primary Education : UPE）」を中心とする国際目標（EFA目標）が合意されました。2000年4月セネガルのダカールで開催された「世界教育フォーラム」では、EFAの目標が未達成であることを受けて「ダカール行動枠組み」の6つの目標が採択されました。その中でも、「初等教育の完全普及」と「教育における男女間格差の是正」は、2000年9月ニューヨーク開催の「国連ミレニアムサミット」で採択された「国連ミレニアム開発目標（Millennium Development Goals : MDGs）」の中の目標2と目標3として取り入れられました。

さらに、2015年9月ニューヨークで開催された「国連持続可能な開発サミット」において「持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals: SDGs）」が採択され、教育は目標4として導入されました。SDG4は、「すべての人にインクルーシブかつ公正な質の高い教育を確保し、生涯学習の機会を促進する」ことを目標に

挙げており、教育の質や公正さ、多様性を重視するインクルーシブ教育の考え方が反映され、各ターゲットは教育分野が細分化され、指標が提示されていることが特徴的です。

第11回目にあたる今回のグローバル教育セミナーでは、「教育問題とグローバル教育」をテーマに、SDGsの4番目の目標である「質の高い教育」に焦点を当てます。基調講演の講師には、発展途上国における教育問題を専門に支援している「公益社団法人シャンティ国際ボランティア会（SVA）」広報リレーションズ課課長の鈴木晶子さんをお招きして、「質の高い教育を届けるために—SVAの活動事例から—」についてお話しいたします。SVAは、インドシナ難民救済活動を機に1981年に設立された日本の国際教育支援を行うNGOで、人間の尊厳と多様性を尊び、「共に生き、共に学ぶ」ことのできる平和（サンスクリット語でシャンティ）な社会の実現を目指しています。現在、タイ、カンボジア、ラオス、ミャンマー（ビルマ）難民キャンプ、アフガニスタン、ミャンマー、ネパールの6カ国7地域で活動しています。今回は、持続可能な開発目標（SDGs）の4番目の教育目標を達成するために、SVAが実施している事業を通して見えるアジアの教育現場の現状、事業実施の問題、新たなチャレンジなどをお伝え致します。

また、「グローバル・イシュー研究演習Ⅱ」の履修学生たちが2ヵ月の学習の後に行った、ワークショップ「教育問題と私たち」を紹介しながら、世界と日本の教育問題の実態と課題を

把握し、教育問題の解決のために国際協力・地域レベルで大学生ができること、グローバル教育が果たす役割を考えます。

最後に、本セミナーで後援・協力いただいた、宇都宮市、宇都宮市教育委員会、NPO法人宇都宮市国際交流協会、（公財）栃木県国際交流協会、NPO法人開発教育協会、まちなか・セ

かいネットーとちぎ海外協力NGOセンター、ゲストスピーカー、パネリストの方々、の皆様に感謝を申し上げます。

宇都宮大学国際学部教授／
多文化公共圏センターセンター員（グローバル担当）
重田 康博

学生によるワークショップ「教育問題と私たち」

鈴木 アリサ・李 晶 玄
金 田 日菜子・木 村 華
条 川 涼・ボウ ショウハク
ラ トウ・ノピラ ピッシャパー

みなさん、こんにちは。私たちはグローバル・イシュー研究演習Ⅱの受講生です。

先週行いました、学生プレゼンテーションとワークショップのご紹介をさせていただきます。私たちは「教育問題と私たち」というテーマで、本日の基調講演に向けて教育問題について考えてもらうという目的で行いました。流れはご覧の通りになります。

まず初めに導入としてグローバル/エデュケーション/ファースト/イニシアチブが2015年に公開した2分間の動画を見ていただきました。

『教育は基本的権利であると同時に、持続可能な開発にとって最も強力なツールでもあります。』という文章が冒頭で述べられ、教育がいかに重要であるのかを紹介した動画です。

この動画の中で一例として教育が貧困から抜け出す鍵であり、基礎的な読解力を身につけて学校を卒業できれば（2015年時点で）1億7100万人が貧困から抜け出すことができる、という紹介がありました。そこでアイスブレイクとして、文字が読めないことや読解力がないことがどのようなことなのか、体験してもらいました。内容は、日本語ではない言語の求人表を提示し、どこの会社に応募するのか、ということを受講生のみなさんに考えてもらいました。結果としてCが多く、次にA、Bという順に多かったです。Aの理由としては情報が多い

から、Bの理由としてはAとCの数字は引っ掛けだと思う、Cの理由としては数字が一番大きく、少し字が読めた、などの理由が挙げられました。

さて、答えとしては会社Cが条件の一番良い会社になりますが、文字が全然読めなくて戸惑ったり、少し読めても完全に分かるわけでは無いので不安だった、などの感想が寄せられました。アイスブレイクのため、単純な方法を取りましたが、例えばそれぞれ会社に入って給料の格差が、貧富の格差につながってしまうなど、教育を受けられなかったり、知識がないと引き起こされる問題はさらにたくさん考えられると思います。

続いて本題に移り、SDGsとSDGsゴール4についての説明をしました。SDGs持続可能な開発目標とは、2016年から2030年までに達成すべき17のゴールと169のターゲットで構成されています。これは「だれ一人取り残さない」という理念のもと、持続可能で多様性と包括性のある社会の実現を目指したものです。先進国・途上国関係なくすべての国が目指すべき目標であると位置けられています。

SDGsの目標は大きく、社会分野・経済分野・環境分野の3つに分けることができます。

今回のテーマである「教育」は社会分野に当たります。ユネスコによると世界には2018年時点で、5900万人の小学校に通えない子どもがい

ると発表されています。彼らの中には学校に通うことなく人生を終える人も存在します。また、世界の約10億人の大人は読み書きができません。この中では、女性であることが理由で教育を受けられない地域なども存在します。教育問題といえど、ジェンダーや貧困問題が関連していることが分かります。このような状況を踏まえ、ゴール4は「質の高い教育をみんなに」という言葉を掲げています。これはすべての人に包括的かつ公平で質の高い教育を提供し、生涯学習の機会を促進するという内容です。それでは、教育の質とは何でしょうか。

教育の質とは、学校環境、教育達成度、学習到達度、非認知能力の四つの観点から測る事ができます。1つ目の学校環境とは、教材、机、椅子があるか、トイレ、水飲み場は完備されているか、電気は通っているかなどの学校設備の問題を把握し、改善していくことが求められます。また、物理的な問題の他にも、教員数と教員の能力不足も学校環境に含められます。2つ目に教育達成度とは小学校入学から第5学年までの残存率を示します。途上国では学校に入学したとしても、家事の手伝い、家計を支えるための労働、早婚などを理由に小学校に入学したとしても中退する人が多いです。そのため、入学した生徒がどれだけ残っているのかの割合を測ります。3つ目の学習到達度は学力調査で学力の状況を測ります。4つ目の非認知能力とはコミュニケーション能力、批判的思考、倫理感、市民性などを含む能力のことを指します。現代社会では、環境、貧困、人権などの様々な問題があります。このような問題を自分の問題として捉え、解決方法を生み出す人の育成を目的としています。

次に、SVAの活動地域の一つであるカンボジアと日本の教育問題の現状を説明しました。

カンボジアでは専門家ではない大人が教師をしていたり、賃金が低くて副業をしなければなら

ないなど、生活が十分に保証されていない現状があります。また、子どもの中には年々就学率は高くなってきているものの働きながら通う子どももいたり、学校が遠すぎて通えないなど、様々な事情を抱えた子どもが多くいます。学校環境においても、老朽化した校舎やトイレなどが整備されていないなど課題があります。日本では年々増える外国人児童生徒教育問題や不登校、いじめ問題などがあります。外国人児童生徒問題に関しては、初期日本語指導教室を設置するなど取り組みを初めている地域もありますが、全国的に対策が必要であることが表面化されています。不登校問題ではフリースクール、夜間中学や定時制高校などの学びの場における教育の重要性が問われ、いじめ問題では確実に効果のある取り組みや対策を考え実施される必要性があります。

次に教育問題についてより具体的に考えてもらうために、質問シートを作成し、受講生の皆さんにディスカッションをしてもらいました。質問は正解などの答えを出すためのものではなく、それぞれがどう考えるかといった、考えを導き出すための用途として作成しました。ひとつめに教育を受けられないことによって引き起こされる問題はどのようなものが考えられますか。学歴による就職差別、非識字を含む知識の欠如、自文化の喪失、倫理観・道徳観の欠如、その他、という選択肢の中から最も問題だと思うものにマルを付けてください。という質問でした。集計結果はご覧のようになります。学歴による就職差別が22票、非識字を含む知識の欠如が62票、自文化の喪失が2票、倫理観・道徳観の欠如が13票、その他が3票で貧困問題などが挙げられました。

教育を受けられないことによって引き起こされる問題として一番多かったのが「非識字を含む知識の欠如」でした。理由としては、アイスブレイクで実感したから、文字が読めないこと

が原点で他のすべての問題につながる、といった意見が寄せられました。自文化の喪失の票数が少なかったのは日本人のアイデンティティに対する意識が他の国の人に比べ低いことも関係するのではないのでしょうか。

次に教育に関連して、子どもたちや教育を受けられなかった人々に必要なものは何だと思いますか。学校や図書館などの学びの場所、教材、先生、専門家、相談者などの教育者、NGO・NPOなどのサポート、の中から問題だと思うものを挙げてもらいました。

集計結果はこのグラフのようになりました。学びの場所が67票、教材が34票、教育者が79票、NGO・NPOなどのサポートが47票その他が16票で基礎教育の義務化などの制度、経済的な条件、教育が必要だという意識、国・自治体の支援などが挙げられました。教育に関連して、子どもたちや教育を受けられなかった人々に必要なものとして、一番多かったのは「教育者」でしたが、複数回答が可能であったため、すべてが同じように重要で必要だと答えてくださった方もたくさんいました。それぞれ、教育問題について自分の意見を考えてもらい、他の人と意見交換ができ、深い議論ができた時間だったと思います。

続いて、本日の基調講演に向けての基礎知識としてSVAについての説明をしました。

最後に、私たちが教育問題について考えたこと、重要に思ったことを発表しました。

私たちは授業を通して、教育は発展途上国だけでなく、日本を含めた先進国の問題でもあると知りました。近年、日本では、重視される能力が認知能力に偏っていると思います。しかし、コミュニケーション能力や倫理観、道徳など、非認知能力も教育の質を高めることが重要です。また、この非認知能力は相手や他の人の問題を理解したり、自分の事として考える創造力にもつながります。例えば、日本の教育問題の改善策が途上国の教育問題の改善に応用できるかもしれませんし、その逆も考えられます。国内の身近なところに目を向ける観察力、そして国外の問題を考える創造力を養うことが重要であると考えます。

受講生の感想としては、字が読めないと何もできないと感じた、教育問題が他の問題と関連していることが分かった、意見交換で違う視点や意見を知れて楽しかった、などの感想が寄せられました。以上、学生のプレゼンおよびワークショップのご紹介とさせていただきます。ありがとうございました。

基調講演

「質の高い教育を届けるために－SVAの活動事例から－」

公益社団法人シャンティ国際ボランティア会 広報リレーションズ課課長 鈴木 晶子

今ご紹介いただきました。シャンティ国際ボランティア会の鈴木と申します。皆様おはようございます。今日は、このような機会を頂戴しまして誠にありがとうございます。先ほどの発表がすごく素晴らしかったので、私もちょっとこう大丈夫かなと心配しているんですけども、私自身のお話も交えながら、ぜひ私が活動しているような状況のことを知っていただけたらと思いますし、今日来てくださってるみなさんは、もしかしたら関心が高い方が多いと思いますので、一つのキャリアの参考にして頂けたらと思っています。

私の出身は岐阜県の高山市で育ちました。高校まで高山というところにいました。東京からですとバスで六時間くらい掛かるので、アジアに行くのと同じくらいなんですね。なのでタイに行くのと高山に帰るのが変わらないなんていう状況なんですけれども、なんでこんな仕事をしようと思ったのかを少しお話しますね。高山には実は小学校の途中で引っ越しをして、それまではアメリカで育ちました。それで、アメリカの学校に通ってたんですけども突然高山という田舎に引っ越すことになったんですね。で、私としてはすごいカルチャーギャップが大きかったんですよ。で、アメリカの中でもロサンゼルスという、比較的自由的な場所で、すごくたくさんの国の人と学んでいました。私が通っていた学校というのがアイルランドの校長先生が作ったプライベートな学校で、ただアメリカにあるのももちろんアメリカの国旗掲揚があるんですね。同級生は世界中からきている子たちで、その学校の特徴が、その個人の能力に合わ

せて授業を受ける。例えば当時私は英語が得意だったので、一年生でも英語が得意だと、例えば三年生のクラスに行って勉強できる、もし例えば数学が苦手なら三年生の学年でも二年生のクラスに行って勉強できる、結構自由度が高い学校だったんですね。そうゆうところに通っていたんですけども、突然両親の仕事の関係で高山の公立高校に転入しました。

まず私が驚いたのが、私誰もみんなのこと知らないのに、みんな私のこと知ってる状態でした。やっぱりいろんな違いにすごい戸惑いながら、なんだっけ？とか思いながら過ごしてたんです。そうゆう状況が、自分の原点の一つにありました。相手が知らないこと、自分だけが知っている事、逆に言うと私しか知らないけれども、みんなは知らないんだってことを、どうやってそれをすり合わせながら、自分はこうなんだという自分の意見を持っていくのか、そしてそれを知りながら伝えていくのかということに、幼心ながら課題意識というものを持っていたんですね。とはいえ、みなさんこれから進路を考える時期だと思うんですけども、私は東京の大学に行ったのですが、全然NGOで働こうとか全く思っていなかったんですね。就職先になるともちろん思っていなかったですし、普通に一般企業に就職活動していました。卒論を書いていた時がちょうど9・11の時だったんですね。本当に大きな事件が起きたときに、やっぱり私の人生あれで大きく変わったなと思ったんですけども、日々の報道とか世界の捉え方が大きく変わりました。私がみている世界があまりにもかたよってたなと感じたんですね。そ

れまでに自分なりに勉強して、世界のことに関わりたいという気持ちは持ってたんですけども、私イスラム圏のこと全然知らないじゃないと。それまでももちろん大学の授業で、イスラム教のことを習ったりしていて、ほうそうなんだとか思ってたんですけど、私頭だけで考えてたと思ったんですね。そうなったときに、自分が世界のこと知らないのに、世界のことに関わりたいと持っている自分が、すごく恥ずかしくなったんです。

就職活動していて、とはいえ生きていくためには就職だとも思っていたので、一般企業をいろいろ受けていた時にある会社の最終面接が社長面接だったんですね。その社長さんとお話しをしている中で、私はいいことをいろいろ言うわけですよ。御社に入ったらこうゆうことしたいですとかいろいろね。そしたら社長さんに一言、で君は本当に何がしたいんだと聞かれました。でのその時に、多分百点満点の回答は、はい御社で〜ということを答えるのが多分正解だったと思うんですけども。その時私の中ですごくモヤモヤが膨らんでいて、9・11のことがあって、論文もソフトパワーで世界が変わっていくという論文を書いていたんですけども、そのことをベラベラベラベラ喋ったんですね。やっぱり世界というのはですね、みたいなことを話したら、社長さんにそうだね、きみはそうゆうことがしたいんだと思うと言われました。それで当たり前のようにその会社からは不合格通知が届いたんですね。

私その時に思ったんですよ。多分どこかの会社に入ってもそんなに続かない。自分の生活のために働かないといけないのはよくわかっているけれども、やっぱり今自分がこれをやりたいとか、自分の関心を曲げてまで本当に今選択するものなのかな、どうなのかなということを感じて違う道に進んだというのが大きなきっかけの一つです。調べていく中で、私は何がしたい

んだろうとなった時に、本当に自分が関わってこなかった地域の中でその人たちと一緒に新しく事業をしていくこと、その中でも私が関心を持っているテーマは、アイデンティティーってことだったんですね。アイデンティティーの背景には何があるんだろうかというのは自分の成長過程の中でずっと突き詰められていたことだったので、そこに関わることがしたいと思っていて、縁があってシャンティの活動にすごく共感してシャンティに応募したというのが、少し長かったのですが経緯です。入職してからすぐに海外の教育事業に関わったわけではなくて、国内災害、災害支援を担当するというポジションがありまして、そこから入りました。それはまたちょっと違うバックグラウンドで、私の祖母の家が被災した経験があったんですけども、そういう経験のなかで、初めて自分事ができたんですね。自分が支援を受ける側に立ってみたときにはじめて、他者が関わるというのはこうゆうことなんだとずっと落ちました。それまではいくら勉強していても、自分が何かする側の人間だと思ってたんですけど、いやそうじゃないということが初めて繋がって、それでNGOとか草の根で活動していくということが自分の人生の中の選択肢として見えてきたという経験がありました。そうゆうこともあって入ってからは国内外の災害支援に関わるんですけども。写真はパキスタンの地震で、うちがオペレーションしたときに、現場に入ったときの写真の一枚です。

そういう風に、海外の現場、国内の現場含めて様々な状況のなかで事業を立案しながら実行していくことをずっと行ってまいりました。そうゆう活動をしてきているなかで見えてきた事、感じてきた事というのをここからお話しさせていただけたらと思います。子供たちが育つ環境というのはみなさんが調べていただいていると通りだと思うんですけども。この写

真はどこの国だと思いますか？（写真）学生1「ネパール？」ちょっと違います。学生2「アフガニスタン？」はい正解です。なんでそう思いました？学生2「なんとなく」なんとなく。はい、もしかしたら服装とかで分かったかなーと思うんですけど。これアフガニスタンの写真です。真ん中に見えるのが錆びて動かなくなった戦車で、その周りで男の子たちが遊んでいて、その後ろに美しい山々が連なっています。私たちが活動している地域の一つにアフガニスタンがありまして。今は日本人が行くことはできませんし、先日痛ましい事件があった国の一つです。もう60年以上戦争がずっと続いていて、日に日に治安状況が悪化しています。日本人がいけないので、アフガニスタンのスタッフが年に数回日本に来て事業の調整や相談などをします。スタッフが良く話すのですが、とにかく日々どこで何が起きるかわからない。なので朝スタッフが事務所に来て学校などにモニタリングや事業調整に行くのですが、帰ってこれないかもしれないと思って、今日も一日生き延びようねと。もしかしたらその途中で何かあるかもしれないとそういう気持ちで毎日を生きているんだとお話ししていました。あまりにもそういう状況がずっと続いていて、出口が見えないので、精神的にみなさんまいっていて、アフガンを離れるという選択をしている人も今増えています。ただ、アフガンを離れられる人は一握りなので、そういう状況の中でも暮らしている子供たちは日常の中にも争いがあるんですね。それは今すぐ戦闘に巻き込まれるというだけではなくて、戦争の遺物、過去から脈々と受け継がれている争いの中で生きている状況があります。

世界で5200万人の初等教育を受けられる年齢の子供たちがアクセスできていない。1600万人が南アジア地域に密集していてアフリカより多いんですね。教育問題はアフリカのことが注目

されることが多かったんですけども、今は圧倒的に南アジアのほうが多いという数字が出ています。中高等教育でみますと、2億6000万人ぐらいが不就学と言われています。SDGsでは2030年までの達成見込みというのが毎年出されているんですね。それを見ても今年出された数字の中では、2030年でも六人に一人の子供が初等教育にアクセスできない。そして十人中六人の中高生以上の子供たちがアクセスできないと言われています。なので教育状況の改善のスピードアップをしていかなければ、2030年に達成したい目標には到達しないということが数字として出てきています。教育の問題は子供たちだけではなくて、成人の識字の問題にも絡んできています。約八億人の読み書きのできない方がいると言われています。60%以上が女性と言われています。例えばシャンティで活動している地域であるカンボジアの事業対象地の村などで調査しますと、公的な識字率は80%以上と言われているんですね。ただ、実際に調査すると3割4割ぐらいですね。それだけデータに差があるんですね。特に識字調査は難しいんです。先進国は識字率のデータを出していないんですね。なんでかという、そもそもデータがなくて調査ができない状況です。

なので日本はずっと100%神話というのがあって、識字率はほぼ達成されていると言われているのですが、実感としては100%とは全然思わないですね。結局識字の問題は人権にすごく関わるんですね。「あなたは読み書きできますか？」ともし聞かれたとしたら、ここにいらっしゃるみなさんは「はい」と答えると思います。それで「はい」と答えたあとどうやってエビデンスとして取ったらいいんでしょうか？それをさらに疑って「読んでみてください。書いてみてください。」という風に突っ込んでいったときに、それは皆さんにとってどうゆう気持ちになりますか？「なんでこんなに疑われなきゃなら

ないんだろう」と思うんですね。書けない、読めないという引け目があるので、そうなったとき本来は調査をしていかなければいけないんですけれども、実行が難しいのが現状ではあります。ですので、全世界の正確な数字をだすとこれだけでは収まらないのではないかなと思います。

もう一つ教育課題共に難民の課題は大きいです。学校に行けなかった理由を、特に親世代、カンボジアなどがそうなんですけど、難民として過ごしていた時期は学校に行くことが出来なかったので学校に行くということがどうゆうことなのかよくわからないということをよく聞きます。難民の数も毎年増えていまして、減る事はありません。今は7000万人以上、その二人に一人が十八歳以下の子供たちという風に言われています。難民の数自体も増えていきますけれども、帰還している人の数も増えているので、数字としては行ったり来たりなんですけど、排出している数だけ見ますと年々右肩上がりにはなっています。現在課題はたくさんありまして、SDGsが制定されたのが2015年9月の国連総会でした。私はこの時期2015年の春から夏にかけてニューヨークにいたんですけども、すごく興味深いと思ったのが、制定前SDGsに関するイベントやキャンペーン、勉強会などが様々なレベル間で活発に行われていたという印象でした。その後日本に帰ってきてSDGsの話をするとうとNGO界隈の人たちは知ってはいたんですけども、全然報道にも上がってこなくて、どのようなことだろうかと感じた覚えがあります。MDGsの流れからあって、セクターを超えて課題に対して真摯に向き合って改善していかなければいけないと作られたのがSDGsでした。2015年の日本国内での温度と今の温度は全然違うなと感じています。新聞などにSDGsの言葉が出ない日はないですし、特に都内などでは、企業訪問の際にSDGsのバッチをつけてい

る方がすごい増えてます。何かというとSDGsの話になっていて、それを私は日本っぽいなと思っているんです。形から入る、キャンペーンから入るみたいです。でも突っ込んでいくと、「何をしたらいいかわからないんですよ」みたいに言われるんです。「どうしたらいいかわからないので、とりあえずバッチ付けてます」みたいな話をすごい聞きます。それでも認知度が増えているのは良いのかなと感じています。ただ本来は大きな変革をしていかなければ、世界の課題は変わっていかないといけないことをみんなが分かっているの、進むための共通目標として作られたものではありません。その中でシャンティとしましては、目標4の教育を達成するために活動を続けております。教育は全ての根幹だと思っています。目標はこうやって並べられると全部並列になるんですけども、私は並列ではないと思っているんです。教育がなければ就職もできないわけですし、教育がベースで広がっていくことがたくさんあると思っています。ただ目標値にしてしまうと4番でみたいな形になっていきます。4番の作られたポイントの一つというのが、質の問題にフォーカスされたということがあるのかなと思うんですね。アクセスだけではないというのは思っています。その中でもシャンティとしては非認知スキルをととても大切にしています。

話をするときには私はすごく難しいなと思うんですけども。多分私たちは当たり前のように身に付け過ぎているんだと思うんですね。非認知スキルって、創造性だったり、協調性だったり、批判的思考とかって挙げていくとこういうことなんです。なんですけど、じゃあこれってどうやって身に付けるんだっけ、みたいなことがわからないんだと思うんですね。私のことだけを考えてみても、私が自分で意識をして非認知スキルを身に付けようってあんまり考えたことないんですよ、振り返ってみても。もう少し

言うと、教育に関してもそうで、私自身がなんで学んできたんだろうかと振り返ったことも実はあんまりなかったんですね。

ただ私が長期で滞在したのがカンボジアで、それまでもいろいろな国に行ってたんですけども、駐在して初めて感じたのが「人ってなんで学ぶのだろうか」という大きな問いに直面した瞬間でした。その中で、読み書きそろばんだけを人は身に付けば生きていけるかというところじゃないんだと思ったんです。例えば、仕事をする中で、私は同僚がカンボジア人で、現地の学校の先生もカンボジア人で、全然知らないカルチャーと全然違うバックグラウンドで育ってきた人たちと一緒に仕事をするってすごい難しいんですね。例えばカンボジアは2時間半お昼休みがあるんです。その2時間半のお昼休みのことを知らなくてワークショップの計画とかを作れば昼休みは誰も来ないんですね。そういう小さい文化を知るとかですね、生活習慣を知ることだけでも、配慮しなきゃいけない事はたくさんあるんです。例えば女性は足を出してはいけない、ロングスカートををはきましようとか。特にそのような文化的な面、日ごろの日常的な面だけじゃなくても、その考え方とか配慮しなければいけないポイントが全然違うな、と感じました。それを感じる能力を自分が持っていなければ、一方的に私が偉そうに「なんでこの人たちはこうなんだ」みたいなことを思うわけなんですね。その時にふと思ったんですよ。「ああそうか」と。私は相手の立場に立ってモノを考えなきゃいけないし、きっと相手側も私が日本人なので日本ってこうなのかなという、お互いのやり取りですね。お互いを知ることとはやっぱり私自身が経験してきたからできたことだと思うんですね。

そのお互いのやりとりとか、お互いを知ることとは、私自身が経験してきたからできたことだと思います。それがきっとこの非認知ス

キルというものに繋がっているのだと感じました。あまり具体的になりきれない非認知スキルの話なのですが、今後多分みなさんが直面する場というのが、職場における評価です。うちもそうなのですが、業績評価と行動評価と、2つ評価されます。その時にいつも言われるのが、機能的識字能力だけで社会人としていいかといえそうではなくて、非認知スキルと言われる創造性とか自制心とか自己認識能力がなければ社会人として働いていくということが、難しくなるというように言われています。それをどうやって身に付けるのかと言う話に戻るのですが、いろんな側面があると思います。ただシャンティとして教育活動をしている中で1つ言われているのが、幼少期の教育の関わりが重要だということです。これは東洋経済新報社が出している『幼児教育の経済学』の中でも言われているのですが、1つは言葉の力、あるいは読書推進というのも、本を読むとか本を読み聞かせてもらうとか、言葉に触れる、感情に触れるということを幼少期にしておかなければ成人になってからではもう身に付かないと言われてます。なので、最近途上国、開発の文脈だけではなく日本国内でも幼児教育の見直しはすごく言われているのですが、必要な時期にいかにも多様なものに触れるのか、関わるのか、特に言葉に触れるのかということがその後の成長にすごく関与していると言われてます。非認知スキルはシャンティとしてはすごく重要で、かつ教育の全ての原点だと思っています。このベースができて初めて知識を身につけられる土場ができると言われています。なので、よくカンボジアとかもそうなのですが、保育園や幼稚園がなく、そのまま小学校に入学しても大体1年生の退学率が非常に高いです。その1年生の退学率を減らすためにどうするかというと、小学校前の準備期間をちゃんと設けなければ、小学校に入学しても継続できないとすごく言われてい

ます。そういう意味で、この非認知スキルの重要性をぜひ知っていただけたらと思います。

ここからシャンティの話なのですが、シャンティ国際ボランティア会という団体で、今年で39年目を迎えるNGOで、日本で設立されました。私たちは本を通じて生きる力を育むことを目的にしている、特にアジアを中心に活動しております。私が1つすごく共感している理念が、『共に生き共に学ぶ』、平和な社会を作りたいということです。先ほども話しましたように、結構、支援をするんだという強い気持ちで現場に来るとか現場に入る人がすごく多いのですが、実際行ってみると自分ができることなどほとんどないです。本当につなぎ役でしかない。それよりも現地の人と一緒に考えて本当に今何が必要なのかを、アンテナを張りながら、そこからいろいろ作っていくとなったときに、自分が学ぶ姿勢を持っていなければ、持続性と現地の人に根付いた活動を立案し、続いていかなければいけないと感じています。私たちの活動の軸としては大きく3つあります。1つは日本から本を届ける、あるいは現地で出版をするという活動です。その本を通した教育というのが特徴なのですが、そもそも学校がないとか図書館がないとか、施設が足りないということも圧倒的に多いので、その建設なども行っております。一番力を入れているのが人の育成です。いつまでもシャンティがやり続けることを目指しているわけではなくて、現地のそれぞれの文脈があるのですが、地域に根ざしてそこにいる人たちが継続できるようにしてもらえるような形で研修を細かく行っています。ただ、日本と現地のつながりということも大切にしている、その一つに日本から絵本を届けるという活動もあります。といっても日本語だと読めないなので、例えばカンボジアだったらクメール語のシールを日本語の文章の上から貼って、その本を届けるということをして20年。これまで30万冊以上の本を

届けて参りました。

そのように活動を続けている背景としましては、一つはカンボジアでの活動が大きなきっかけでございます。皆さん、この写真を見た事ある方はいますか。年齢が若い子もいてタグが付いています。これはカンボジアの首都のプノンペンという場所にある、トゥールスレンというもともと高校でした。その学校がある時期収容所になりました。そのトゥールスレンで亡くなった方々の写真の一部です。男性も女性も年配の方も子供もいます。これは何かというと規則性がありません。何が起きたかという話を少しします。カンボジアは波尔・ポト政権という時代がありました。今から40年前位の話なのですけれども1975年から1979年、本当にわずか4年弱なのですが250万人以上が虐殺されたと言われています。当時の人口の約3分の1と言われています。この波尔・ポト政権が目指したのは急進的な社会主義国でした。教育は悪とされましたし、それまで政権を握っていた人たちはほとんどが殺されました。検問所みたいなのがたたくさんあり、例えば眼鏡をかけている人はそれだけで勉強ができると言われて虐殺の対象になったりとか、ペンをこうやって持つと言う事は書けるということなので、君は勉強ができるねと言って連れていかれる、というようなこともあったと聞いています。要するに、労働が第一だったのでプノンペンと言う街で暮らしていた人たちもみんな田舎のほうに行って米を作ったり強制労働させられていました。学校はもちろん閉鎖されましたし、焚書政策といって本は全て焼かれました。それだけではなくて、宗教特に仏教の国なので、仏教が弾圧されて寺院も取り壊し、あるいは軍隊の倉庫とかに使われていました。波尔・ポト兵の中心的な年齢というのが、13歳前後であったと言われていいます。いわゆる少年の人たちが多かったと言われていて家族制度も禁止されたので、例えば年配

の男性たちはここで暮らすとか子供の女の子たちはこっちで暮らすとか、そのように解体されていきました。言葉を持っている人、考えを持っている人をどんどん排除していった政権です。これではと言って国を逃れた人たちが、カンボジアの隣のタイに逃れて、タイ国内に難民キャンプが当時できました。

その状況を見まして、当時は日本のNGOがほとんどなくて、今で言う国連の団体とか大きな欧米系の団体がその難民キャンプに対して支援に入っていたのですが、その中で先日お亡くなりになられた緒方貞子さんが当時外務省に勤められていて、緒方さんが日本国内のいろんな組織を回りながら同じアジアでこんなことが起きているのに日本は何をやっているのだと、どうしたら日本の人たちがこの状況にコミットできるのかということを解いてもらったそうです。その1つの組織が曹洞宗という1つの仏教系の団体宗派がありました。そこで、ではわかりましたと、若いお坊さんを現地に派遣しましょうと言って派遣されました。そのお坊さんたちが、その状況を見たのですけれどもよく言っていたのが、当時の言葉で当時の難民キャンプを、まるで絵巻物の餓鬼草紙だ、地獄を見たと言っていました。本当に地雷で飛ばされて包帯をぐるぐる巻いている人たちもいたりみんな焦点が合わない状況であったと非常に極限の中で逃れてきていました。

そういう状況を見たときに私たちはどうしたらいいのだと考えたのが、私たちの大先輩の人たちでした。その後に彼らが思ったのがとにかく子供たちが表情も全て奪われてしまっていて泣くことも笑うことも何もない、そういう状況の中から子供たちの笑顔を取り戻すためにはどうしたらいいんだと考えて、その子供たちが笑い声を取り戻すために活動するのが私たちの使命なのだというふうに思い始めました。何をやったかという日本から絵本を持っていて

いてそこで読み聞かせの活動を始めました。そうしたら子供たちの表情が徐々に変わっていった。もしかしたらこれだったら本当に私たちにもできるかもしれないし、今求められているのではないかということで、この写真は当時難民キャンプの中に作った図書館です。このように図書館を作ったり、あるいは地域を回る移動図書館活動というのを始めました。この活動がシャンティの原点になった活動です。それが40年前位です。

その後はシャンティと言う組織が作られまして今年39年経ったのですけれども、ぜひ皆さんに映像を見ていただきたいのですが、当時カンボジアで活動してきた様子をまとめました。

(映像)

ありがとうございます。今見ていただいた映像がカンボジアの活動でした。シャンティはカンボジアで活動を開始しまして、その後6カ国8地域に活動を広げております。今見ていただきましたように学校の建設から図書館、そして本を届ける、そして文化を守っていくということを行ってきました。それぞれの国によって図書館あるいは学校が待つ役割は違います。みなさんのお手元にお配りしている資料にそれぞれ書いていますので、ぜひ読んでください。どこでも私たちが大切にしているのが最終的な3つの点に絞られるかなと思います。様々な教育的アプローチで、教育事業というのは政府レベルであつたりNGOレベルであつたり行われています。しかし、なぜシャンティが本を大切にした文化事業を行っているかといいますと、1つ目は人間の自立にとっては識字と言うのは絶対的に必要な能力だと思います。途上国は教科書だけですべては学び切れない、学校の授業の質だけでは改善できない部分もあります。シャンティは図書館事業だけではなくて、例えばラオスでは先生の指導法のマニュアルの更新を教育省と一緒にっており、その指導法の質

の向上にも努めております。その先にあるのは何かと言うと、識字率を上げていくことです。ただ先ほどもお話しましたようにそれだけでは決して十分ではありませんので2つ目に大切にしているのが、文化的アイデンティティーの継承です。特に学校に行くこともできなかった大人の方達であったり、図書館が私を救ってくれたと言っている子がいまして、この子は難民キャンプで暮らしている子なのですが、家庭環境もあまり良くなって、とにかくものを盗んでも生き抜けと言われていて学校にもほとんど通うことができなかつた、こうなってくると学校に戻ることができません。そうなったときにセーフティーネットとして考えられる場所の1つが図書館であった。彼女は図書館を通して文字を学びそしてお話を聞きながら言葉を覚え、今は読み聞かせをする立場になりました。このように自分自身のアイデンティティーを持つことでそれを次の世代に継承できるということ、そして3点目が学ぶ事は人間の尊厳だと思います。それをNGOである私たちはその理念を追求するということだと思うのですが、シャンティとして追求しているのが、その尊厳を大切にすることです。しかしながら、私たちがとっているアプローチでこの複雑化した課題が全て解決するとは全く思っていないのですが、希望があると信じ活動を続けております。どうもありがとうございます。

質疑応答

Q1, 図書室に置く、日本からの寄付の本は現地語に訳しているということでしたが、翻訳を行う人材はどのように確保しているのですか。

A1, 希少言語と言われる、カレン語やパシュトゥー語は日本では訳せないため、まず英語に訳して、それを現地の職員が訳します。例えば、クメール語やラオス語は日本でも訳せる方がいて、謝礼をお支払いして訳してもらっています。

Q2, 図書館に主に絵本が置いてあるように感じましたが、数学や言語を学べるような教育本なども置いてあるのでしょうか。もし、絵本だけが置いてあるのであれば、絵本は楽しんで読むことはできますが、将来使えるような知識を十分に学ぶことができるのか疑問に思いました。

A2, 絵本だけではなく、学年に合わせて読み物や学習本も置いています。ただし、現地語で出版されている本のほうが圧倒的に少ないです。例えば、カレン語で出版されている本は世の中にほとんど存在していません。なので、英語の本やビルマ語の本なども置きますが、結局は母語で読めないと本当の意味での学びにつながらないのでそこが非常に難しいです。各国の出版事情が全く違うのでその国の状況に合わせて、なるべく幅広く本を集めるようにしていますが、なかなか難しいです。なので、日本から届けている本はお話しの絵本だけではなく、いわゆるかがく絵本などの学べる絵本もなるべく数を入れるようにしています。

Q3, 図書館の施設はとても素晴らしいと思いますが、現地で勉強意欲がない子どもたちや、本が嫌いな子どもたちも少なくないと思います。そのような子どもにはどのような対策をされていますか。

A3, 特に都市部に本は読まないという子が多く、日本でもそうですが、そもそも本に対して興

味の無い子もいます。学びたくないというのはどこの国にもあるので、それは先生たちがすごく工夫しています。例えば、カンボジアでは新学期が始まる前に、大々的なキャンペーンが村ごとに行われます。生徒たちはパレードのように村々を歩き、新しい学年が始まるのでみんな学校に来てねと啓発活動を行います。先生たちは一軒一軒家を回って、この家の子どもは学校に来ますよねというのを両親や祖父母に伝えます。特に、両親の代わりに祖父母が孫の面倒を見ているなど両親と住んでいないケースが多数あります。そうすると祖父母は学校に行っていないので、蜜にコミュニケーションをとるようにしています。なので、子ども自身の学びたくないという気持ちではなく、家族や地域全体で学校をサポートすることをなるべく意識するようにしています。

Q4、カンボジアで独裁政権がひかれ、教育が迫害されていた時にSVAが絵本を寄付したとあったのですが、SVA自体が迫害の対象にならなかったのですか。

A4、SVAがカンボジアで活動を開始したのは波尔・ポト政権が終わった後なので、その時代の迫害対象にはなっていません。ただ、カンボジアもそうですが、最初に活動しようとしたときに、学校の校舎が欲しいが、図書館や本は別にいりませんと教育省に言われたり、アフガンでは絵本は偶像崇拝の対象になってしまうので駄目ですと言われたりしました。それまで図書館や本をほとんど見たことがなかったから起きたことでした。しかしそれを、粘り強く交渉しながらどうして図書館や本が子どもの教育にとって必要なのかということを伝えることが難しかったです。そういった時には、読み聞かせを実際に行い、読み聞かせの良さに先生たちが気づき、そして子どもたちが変わっていくと、教育省も変わっていくというのがSVAで行ってきたボトムアップです。

Q5、カンボジアやコンゴなどの貧困地域や紛争地域、破綻国家では教育は重要ですが二の次に考えられていると思うのですが、そういう地域で教育支援を行うときに一番重要なことや活動内容は何か。自分たちの身の安全を確保されない中で子どもたちに教育を届けるのはすごく大変なことだと思うので具体的な活動内容が知りたいです。

A5、アフリカのことはわからないので自身の経験から言えることは、日本人である外国人が活動する中で最も気を付けなければならないのは安全の確保です。スタッフと話し、コミュニケーションを取り、ちゃんと信頼関係を築くことが必要となります。特に最近中村哲さんの件もありましたが、ドライバーやガードの人とどれほど信頼関係ができていたかがすごく重要です。スタッフがこれ以上外国人は行ったら駄目だと言え、絶対に行きません。それはどうしてかという、活動の目的を考えた時に、日本人が主体的にそこで活動することが目的ではなく、本当の意味で子供たちが学校に通えるための最善のアプローチをとるのが目的であり、外国人が最前線の現場に行く必要性が最も高いわけではないのです。それは、その時々状況に合わせて判断していくので、どこでやるにしても安全性を一番大切にしています。

Q6、大学生のうちに海外でボランティア活動をしたと考えているのですが、どの程度の英語力を身に着けたらよいですか。

A6、もちろん私はネイティブではなく、相手側のスタッフもネイティブではないため、日々の業務は最悪通じればいかなという程度です。ただ、レポートを書いたり、他団体、行政組織とのコーディネーションミーティングでは共通言語が英語であることが多いため、ある程度自分の意見が言え、理解できるほどの英語力があつたほうがいいのではないかと思います。

Q7、現地に届ける絵本はどのようにして選定されていますか。

A7、最初に各事務所から、必要なジャンルのリクエストをもらいます。例えば、平和や家族、スポーツ、かがく絵本、友情など様々なものがあります。そして、リクエストをもとに本のリサーチに入ります。訳す際、本にシールを貼るのですべてのタイトルにおいて、出版社の著作権の承諾をとっています。選定したタイトルを出版社に確認して、許可をもら

い、最終的にオリジナルを現地に戻し、地域で絵本の文脈が受け入れられるかどうか、訳せない擬音語や擬態語が多い本は省くなど、細かい条件の中で最終的に決めています。特に、各国によって幼稚園や小学校、コミュニティ図書館で全世代が来るなど、対象者が異なるため、赤ちゃん絵本が必要なのか、高学年向けの読み物が必要なのかなども変わってきます。事業対象者と出版社から許可が下りるか、訳せるかという点で決めています。

コメント

宇都宮大学国際学部准教授 栗原俊輔

今日はカンボジアを中心としたお話しありがとうございました。

実は最後のビデオの手束さんと一緒に働いていました。1990年代カンボジアが内戦の最終局面の頃、プノンペンに住んでいて、バズーカやスタンガンが毎晩鳴っていて本当に怖かったです。人間は怖いことにそんな状況にも慣れてしまうのです。最初は怖くてストレスで蕁麻疹が出たりしていましたが、そんな状況の中でも寝られるようになるのです。そういう時期にカンボジアに行っていたので非常に興味深くお話を伺っていました。私もシャンティ国際ボランティア会を知っているので、お話を聞きながら、今もずっと活動しているのだなと興味深く拝見していました。

今日は非認知能力についてのお話がありましたが、皆さんには非認知能力はありますか。非認知能力の反対は何かわかりますか。AIです。AIという言葉も最近は認知されてきていますが、AIができないことが非認知能力です。自分で考えて推察し、いい意味ではありませんが、忖度など、AIはできません。非認知能力を育てるには教育がすごく大事です。「日本人でもスリランカ人でもカンボジア人でも子どもの笑顔はみんなかわいいですが、1990年代後半、内戦下のカンボジアにいた時には、笑わない子もいました。3.4歳を、そういう状況下で過ごすことで、笑わなかったり、無表情だったりするのです。いま、子どもは誰だってかわいいと言いましたが、それは世界的環境や教育で育てられるものだと思います。以降、スリランカに住んでいた時も、スリランカの内戦地

域の少年兵や子供たちも笑わないのです。それこそ、非認知能力がないロボットのように、すごく怖いのです。そう意味でも教育はすごく大事です。そして、非認知能力ともう一つ何かというと、いわゆる想像力です。

今日もお話しいただきましたが、こういうものを育てることによって、SDGsのように長期的に豊かな社会を作っていくことができるのではないかと思います。それこそ、先ほどもSDGsは日本的だというお話がありましたが、日本ではある程度マジョリティが言い出すとみんなそれを言い出すという面白い傾向があるので、みんなわけわからずSDGsと言っているのだろうなとちょっと思ったりもします。しかし、それはすごく大事なことで、文化的なアイデンティティの一つで、日本はそういう文化なのでよくわからなくてもSDGsというものがあのだなということを知ってもらうのが大事なのではないかなと思いました。国際協力という仕事は、想像力が大事です。というのも、現場がここではなく海の向こうなので、今はスマホやITなど割と現地のことが分かるようになってはいますが、それでも実際に目の前で触れることと、ネットの向こうで見えるものは全然違います。そういう意味でもこの仕事は、想像力が試されることが多く、実際に現場に行ってみるとコミュニケーションギャップがあったり文化の違いがあったり、非認知能力が試されます。

このような話に興味がある学生は、研究室に来てください。今日はありがとうございました。